慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福沢諭吉と亀井学の思想： 福沢における「縦に慣れたる資力」とは何か
Sub Title	
Author	坂本, 慎一(Sakamoto, Shinichi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2003
Jtitle	近代日本研究 No.20 (2003.) ,p.175- 203
JaLC DOI	
Abstract	福沢諭吉は文明開化の第一人者とされる。彼は欧米文明を本格的に輸入した最初の世代であり、そのことをもって評価されることが多い。しかし、彼のこの業績をたたえるあまり、明治維新以前の日本がまったくの無学であったと解釈することは正しくない。維新以前の日本における学問の蓄積は、欧米文明の理解に役立ったはずである。福沢自身もこの事実ははっきりと認めている。従来余り注目されてこなかった彼自身の言葉として次のようなものがある。今日我日本人にしてよく洋書を読み、其巧なるは決して西洋人に譲らざる者多し。其然る由縁は何んぞや。吾人の始て洋書を学びたるは僅に数年前のことなれども、字を読み義を解するの教育は遙に数十百年、父母祖先の血統に之を伝へたる欺、若しくは全国一般読書推理の空気に浴したるものにして、其横文を読むの力は本来無一物より始造したるに非ず、唯僅に縦行文に代るに横行文を以てし、縦に慣れたる資力を横に変形したるものゝみ。福沢が言うには、明治の日本人が巧みに洋書を解釈できるのは、維新以前に日本人が培ってきた学問の蓄積が存在するからである。この「縦に慣れたる資力」があるからこそ、明治以降の日本人は「西洋人に譲らざる」実力を有していた。この解釈は、福沢自身にも当てはまる。「縦に慣れたる資力」とは、福沢の場合、蘭学修行を始める前に蓄積した学問であった。彼にとってはこの知性こそ、ウェーランドやバックル、ギゾー、J・S・ミルなどの政治・経済思想を価値あるものと判断し、活用せしめた原動力であった。従来の福沢思想研究は非常に精緻なものもあるが、彼が影響を受けた和漢書も視野に入れた研究は多くない。これまでは、主に西洋思想から福沢の思想を解析する方法が主流であった。本稿では、福沢における西洋思想の影響は決して否定しないが、彼が洋書と出会う前に影響を受けた政治思想に焦点を当てたい。福沢は自分自身の漢学について、次のように証言している。殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五巻の内三、四巻でし

	まうのを、私は全部通読、およそ十一度び読み返して、面白いところは暗記していた。それで一ト通り漢学者の前座ぐらいになっていたが、体の学流は亀井風で、私の先生は亀井が大信心で、余り詩を作ることなどは教えずに寧ろ冷笑していた。ここで福沢が言う「先生」とは、独学で亀井学派になった白石照山である。福沢は、十九歳までこの白石の塾で亀井流の左伝学を学んでいた。漢学者の前座にまでなっていたことから考えても、福沢におけるこの思想の影響は注目に値する。亀井学はその難解さゆえか、戦後日本における漢文学でもあまり分析の対象になっていない。租裸学の一派として扱われてしまうことがほとんどである。戦後の左伝学においても、亀井の貢献は忘れられている。福沢はその生涯において、「一身独立して、一国独立す」という思想を主張し続けた。明治二年に個人的書簡で述べ、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』ではその詳細な内容を展開し、『通俗民権論』や『通俗国権論』でも同様のことを説いた。さらに最晩年に書いた『福翁百話』の序言でも「一身一家の独立能く一国の基礎たるを得る」と述べている。福沢の思想は状況により主張の力点が異なるなど、その本質を捉えにくい面もあるが、国家の独立こそ、生涯にわたってこだわり続けた思想であると言ってよい。洋書から福沢思想を分析するこれまでの研究では、福沢の言う「国の独立」はどのような源泉から来たものか解明できなかった。彼が読んだとされる洋書の中に、「国の独立」を中心課題とする思想家は、まだ発見されていない。この事実を踏まえれば、彼自身が「やかましい先生に授けられて本当に勉強しました」と述べる亀井流左伝学の影響は分析する必要がある。以下、最初に亀井流左伝学を紹介し、この学問と福沢思想の類似性を指摘したい。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20030000-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十巻（二〇〇三年）

福沢諭吉と亀井学の思想

――福沢における「縦に慣れたる資力」とは何か――

坂本慎一

序

福沢諭吉は文明開化の第一人者とされる。彼は欧米文明を本格的に輸入した最初の世代であり、そのことをもって評価されることが多い。しかし、彼のこの業績をたたえるあまり、明治維新以前の日本がまったくの無学であったと解釈することは正しくない。維新以前の日本における学問の蓄積は、欧米文明の理解に役立ったはずである。福沢自身もこの事実ははっきりと認めている。従来余り注目されてこなかった彼自身の言葉として次のようなものがある。

今日我日本人にしてよく洋書を読み、其巧なるは決して西洋人に譲らざる者多し。其然る由縁は何んぞや。吾人の始て洋書を学びたるは僅に数年前のことなれども、字を読み義を解するの教育は遙に数十百年、父母祖先の血統に之を伝へたる歟、若しくは全国一般読書推理の空気に浴したるものにして、其横文を読むの力は本来無一物より始造したるに非ず、唯僅に縦行文に代るに横行文を以てし、縦に慣れたる資力を横に変形したるもの、み。[1]

福沢が言うには、明治の日本人が巧みに洋書を解釈できるのは、維新以前に日本人が培ってきた学問の蓄積が存在するからである。この「縦に慣れたる資力」があるからこそ、明治以降の日本人は「西洋人に譲らざる」実力を有していた。

この解釈は、福沢自身にも当てはまる。「縦に慣れたる資力」とは、福沢の場合、蘭学修行を始める前に蓄積した学問であった。彼にとってはこの知性こそ、ウェーランドやバックル、ギゾー、J・S・ミルなどの政治・経済思想を価値あるものと判断し、活用せしめた原動力であった。従来の福沢思想研究は非常に精緻なものもあるが、彼が影響を受けた和漢書も視野に入れた研究は多くない。[2] これまでは、主に西洋思想から福沢の思想を解析する方法が主流であった。本稿では、福沢における西洋思想の影響は決して否定しないが、彼が洋書と出会う前に影響を受けた政治思想に焦点を当てたい。

福沢は自分自身の漢学について、次のように証言している。

殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五巻の内三、四巻でしまうのを、私は全部通読、およそ十一

度び読み返して、面白いところは暗記していた。それで一ト通り漢学者の前座ぐらいになっていたが、一体の学流は亀井風で、私の先生は亀井が大信心で、余り詩を作ることなどは教えずに寧ろ冷笑していた。[3]

ここで福沢が言う「先生」とは、独学で亀井学派になった白石照山である。福沢は、十九歳までこの白石の塾で亀井流の左伝学を学んでいた。漢学者の前座にまでなっていたことから考えても、福沢におけるこの思想の影響は注目に値する。

亀井学はその難解さゆえか、戦後日本における漢文学でもあまり分析の対象になっていない。徂徠学の一派として扱われてしまうことがほとんどである。戦後の左伝学においても、亀井の貢献は忘れられている。

福沢はその生涯において、「一身独立して、一国独立す」という思想を主張し続けた。明治二年に個人的書簡で述べ、[4]『学問のすゝめ』や『文明論之概略』ではその詳細な内容を展開し、『通俗民権論』や『通俗国権論』でも同様のことを説いた。さらに最晩年に書いた『福翁百話』の序言でも「一身一家の独立能く一国の基礎たるを得る」と述べている。福沢の思想は状況により主張の力点が異なるなど、その本質を捉えにくい面もあるが、国家の独立こそ、生涯にわたってこだわり続けた思想であると言ってよい。

洋書から福沢思想を分析するこれまでの研究では、福沢の言う「国の独立」はどのような源泉から来たものか解明できなかった。彼が読んだとされる洋書の中に、「国の独立」を中心課題とする思想家は、まだ発見されていない。[5] この事実を踏まえれば、彼自身が「やかましい先生に授けられて本当に勉強しました」[6]と述べる亀井流左伝学の影響は分析する必要がある。以下、最初に亀井流左伝学を紹介し、この学問と福沢思想の類似性を指摘したい。

一　亀井南冥・昭陽と白石照山、『春秋左氏伝』

福沢思想と亀井流左伝学の類似性を示すために、ここではまず亀井南冥、亀井昭陽、亀井学を福沢に授けた白石照山について解説したい。また、『春秋左氏伝』についても、本稿の課題に沿って考察したい。

南冥は、名は魯、字は道斎、主水と称し、南冥は号である。[7] また別に信天翁、居念居士、苞樓という号もある。寛保三（一七四三）年八月二十五日、筑前早良郡姪の浜忘機亭に生まれた。父は聴因といい徂徠学を奉ずる医者であった。聴因は南冥を徂徠の門人である大潮に従学させて、己の志を継がせた。南冥は後に大阪に出て永富嘯庵にも従学し、医学を修める。永富は徂徠の門人である山県周南の弟子でもあるので、南冥は二つの経路で徂徠学を継承したことになる。

帰郷後は医業の傍ら経書を弟子に教えていたが、安永七（一七七八）年、藩の儒員に抜擢される。後、天明四（一七八四）年には、さらに藩校の甘棠館の祭酒に大抜擢される。甘棠館は西館ともよばれて主に徂徠学を講義し、東館の朱子学に対抗した。南冥はその学問は優秀であったが、才子肌であるゆえんか、権威に屈せず攻撃的な性格であったと伝えられる。そのため周囲の恨みを買い、弟子が離れてゆくこともあった。やがて南冥が大宰府の石碑のために作った文章に不穏な文字があると讒言され、寛政四（一七九二）年、祭酒を免ぜられる。後に楽しむところなく、文化十一（一八一四）年、発狂して自ら家に火を放ち、自殺したと伝えられる。

昭陽は南冥の長子で、名は昱、字は元鳳、昱太郎と称し、昭陽は号である。[8] 別に空石、月窟、天山遯者と号

した。南冥とは違い、努力家肌で温厚な人柄であったようである。十九歳で『成国治要』を著してその才能を発揮し、甘棠館の句読師に任ぜられた。しかし校舎火災の後、儒官を免ぜられて平士となる。以後は家塾で広瀬淡窓・旭荘など優秀な弟子を育てるが、主に古典を読んではその注釈本を記すという生活をおくった。

膨大に記された昭陽の著作のうち、特筆すべきは、『左傳纘考』（天保二〔一八三一〕年）である。[9] 昭陽は『左傳纘考』の「附録」のなかで「左氏あるより以来、蓋し深く知り、篤くこれを信ずるは、我が三世の如き者、未だあらず」[10]と述べ、亀井三代による左氏伝研究が空前の規模であることを誇っている。昭陽は当時の清朝考証学派による研究も把握しており、亀井派のほうが優位であることを認識していた。昭陽は「春秋の古へに復る者、それ必ず海の西に在らずして、海の東、実にその人あるかな」[11]と述べる。

これは第三者的に見ても首肯できる判断である。亀井昭陽の一歳年上に当たる佐藤一斎は『春秋左氏伝』の講義に、中井履軒の『春秋左伝雕題略』（弘化三〔一八四六〕年刊行）を使っていたが、[12] この書は左伝の本文がなく注釈だけで約四〇〇頁である。これに対し、『左傳纘考』は同じく本文がなく注釈だけで四、七〇〇頁にもなる。しかも一頁あたりの文字数は『左傳纘考』のほうが多い。左伝の本文も掲載されているものとしては秦鼎の『春秋左氏伝校本』（文化九〔一八一二〕年刊行）が約一、八五〇頁、安井息軒の『左伝輯釈』（明治四〔一八七一〕年刊行）が約二、六一〇頁であるから、注釈だけ抜き出したら『左傳纘考』に遠く及ばない。国内では竹添進一郎の『左氏会箋』（明治三十六〔一九〇三〕年刊行）が出現するまで、『左傳纘考』に匹敵する規模の研究は存在しなかったことになる。

清朝でも乾隆代の梁履繩による『左通補釈』は、左伝の本文がなく注釈だけの形式で約一、八四〇頁であり、しかも一頁あたりの文字数は『左傳纘考』の三分の二から半分程度である。阮元（一七六四～一八四九）によ

る『春秋左伝注疏校勘記』がやはり注釈だけの形式で約一、三五〇頁であり、一頁あたりの文字数は『左傳續考』より少ない。両者とも、『左傳續考』に比べれば、総分量が三分の一から四分の一程度である。劉文淇（一七八九～一八五四）による『春秋左氏伝旧注疏証』も詳細な分析をしているが、劉文淇の生前には刊行されず、ようやく刊行されたのが一九五九年であった。しかもこれは、左伝の前半だけで終わっている未完の書である。

『左傳續考』は決して冗長な作品ではなく、詳細であるがゆえに膨大な分量を有している。『左傳續考』に比べれば、他の作品のほうが、解読できるところにだけ注釈がついているような観が否めない。清朝考証学派の研究ですら『左傳續考』の半分にも満たないことを考えても、亀井学派は、当時世界で一番詳しく『春秋左氏伝』を読んでいたと判断してよい。左伝の解釈は竹添進一郎の『左氏会箋』をもって完成したといわれるが、竹添は「自序」のなかで「亀井氏、最も詳備たり」[13]と述べている。

昭陽は『家学小言』第二十六章のなかで「春秋の義、左伝は孔門に合す。他に求むるべからず」と述べ[14]、公羊伝、穀梁伝を斥ける。亀井学は『孟子』『荀子』を斥けたことから「孔子一尊主義」と言われることもあるが[15]、これは正確ではない。昭陽は『左氏伝』を記したとされる左氏も高く評価している。昭陽にとって『左氏伝』は『論語』と同様に重要な古典であった。

なぜ亀井学は『春秋左氏伝』をそれほどまでに重視したのか。客観的な理由は今のところ明らかではない。しかし当時世界最詳の左伝研究を可能にした基本的な条件は、いくつか指摘できる。

第一に昭陽は藩の平士であり、家塾によってほぼ学問だけで生計を立てていた。祖父聴因や父南冥が、始めは医者として活動する傍らに徂徠学を教授していたこととは、大きな差異である。これは亀井二代の学が支持

された結果であると解釈できる。特に父・南冥が抜擢されたことは、亀井学が周囲に理解されることへ大きく貢献したであろう。また逆に南冥は後に失脚したが、そのため昭陽は高い地位で政治的雑務に追われることもなかった。その結果、昭陽は人生のより多くの時間を、生計を立てるための雑務や政治活動ではなく、古典の研究に使うことができたのである。

さらに昭陽は『左傳纘考』の「附録」において、古今中国の膨大な量の左伝研究について言及している。彼は同時代の中国における研究も把握し、『四庫全書総目提要』も参照して、亀井学派が清朝考証学派より優位であると判断していた。この全二〇〇巻の書物を昭陽が閲覧できたことは、当時清朝の書が少なくとも九州北部にはそれなりに流通していたことを示唆している。

この亀井学派の左伝学を福沢に授けたのが、中津の儒者・白石照山である。白石は俗称が常人、牧太郎、諱は牧、字は伯年、号は最初に素山で後に照山とし、整齊居士という号もある。[16] 文化十二（一八一五）年、中津藩士久保田武右衛門の長男として生まれた。後に同じく中津藩士である白石家に養子へ行く。はじめ野本白巌に師事し、長じて天保九（一八三八）年六月、二十四歳で江戸へ出て昌平黌の古賀侗庵に学ぶ。江戸滞在中は佐藤一斎らと交流を持ち朱子学研究に励んだ。しかし帰郷の前後より亀井学に傾倒した。次に福岡藩の亀井に師事することを望んだが、主に亀井側の事情によりかなわず、独学で亀井学を奉ずることになった。

天保十四（一八四三）年家塾・晩香堂を開き、子弟を教え始める。福沢が師事したのはこのころであった。白石はその後、政治的争いにより中津藩を辞し、臼杵藩に迎えられる。福沢もそのころの白石について「藩で何か議論をして中津を追い出されて豊後の臼杵藩の儒者になっていた」[17]と証言している。その後白石は臼杵藩儒官となり、稲葉藩の藩政改革などにも携わる。やがて臼杵を出て四日市郷校教授に就任し、多くの弟子を育

てた。一時は福沢の命を狙った増田宋太郎や、後に渋沢栄一の『論語講義』執筆に協力した尾立維孝などはこの頃の弟子である。

明治二（一八六九）年、照山は中津藩儒官・教授に迎えられ、上士に列せられた。しかし二年後の廃藩置県の際に一切の公職を辞任して家塾に戻った。福沢諭吉とは最晩年まで交流があり、福沢が明治十一・二（一八七八・九）年に『通俗国権論』を記したとき、白石は「国権論跋」[18]という作品を書き福沢に賛じている。白石は、明治十六（一八八三）年十月三日、胃がんにより死去した。

亀井学は『徂徠集』を重視し、詩文など文学的方面にも貢献した。広瀬淡窓は、主にこの方面を引き継いだといえる。これに対し、白石は福沢の証言によると、詩を作ることは冷笑し、広瀬に対して批判的であった[19]。白石はその晩年、『戦国策』の大注釈を計画していたように[20]、亀井学の経史書研究を主に相続した。白石の作品は『照山白石先生遺稿』を見ても断片的なメモ程度の作品ばかりであるが、難解で知られる亀井の経史書研究を奉じていたことから、相当な能力の持ち主であったことが窺える。

次に『春秋左氏伝』について述べておきたい。孔子が当時の近現代史である『春秋』（春秋経）を作ったと伝えられる。戦国時代に左氏某が注釈という形で『春秋左氏伝』を表した。『春秋経』は宋代より、儒家というよりは法家的特徴を有していると指摘されていた[21]。『春秋経』には君臣の義といった議論は見えず、多くの「国人」が登場する。

『左氏伝』もその記述に多くの「国人」が登場する（表参照）。『論語』や『孟子』が明らかに「国人」よりは「君・臣・民」という図式で人物を捉える傾向が強い（A＋BをDで割った値）のに対し、『春秋左氏伝』は圧倒的に「国人」の概念で人物を把握する傾向が強い。この事実については、吉田賢抗も「春秋左氏伝を読む

表・各漢籍における単語数

	A「国人」	B国名＋「人」	C「衆」(人間のみ)	D「民」	(A＋B)/D
大学	3	0	4	22	0.136
中庸	0	0	0	13	0
老子	0	0	6	34	0
論語	0	7	12	49	0.143
孟子	8	33	14	208	0.197
左伝(伝部のみ)	80	866	151	419	2.258
春秋＋左伝	80	1263	151	419	3.205

＊「国名＋人」は「都市名＋人」も含めた。「邑人」は便宜上Bに入れた。
＊野人、狄人、遠人、外人、郷人、輿人、王人、市人、南人などは含まない。
＊「国名」之人というふうに「之」が入った場合は数えない。
＊「abcdef 人」と国名が連なっている場合には、f 人のみ数えた。
＊「衆」は「おおし」と用言の場合もあるが、体言と区別せずに数えた。
＊春秋経と左氏伝のみ手作業だけで数えた。他はコンピューター検索と手作業の検証。

と、当時の君臣の関係というものは、後世の封建制度が確立した大義名分論のやかましい時代とは、大いに異なるものがある[22]」と述べている。同様のことは小倉芳彦も述べ[23]、左伝が「君臣民の義」とは異なるパラダイムで描かれていることを指摘している。この思想は別な言葉で表現すれば法家思想と言ってもよい。「鬻拳の兵諫」の例を引くまでもなく、左伝は非儒家的な思想に満ちている書である。

二　亀井学の思想

1　『春秋左氏伝』の読み方

『左傳纘考』の内容は、主に①『左伝』の記述についての考証、②政治や修身についての思想的議論、③『左伝』の文章についての文学的鑑賞の三つに分けられる。これらのうち本稿の課題で特に重要なのは、思想的議論である。ここではまず、昭陽の『左伝』の読み方を、お

もに『左傳纘考』から抽出してゆきたい。

i　呪術・迷信の否定

津田左右吉は、左伝の内容を「儒教的思想」「覇者的戦国的思想」「呪術宗教的な思想」の三つに分けている。[24] これを①「君・臣・民」の大義名分論、②法家的思想、③呪術的非合理的思想と言い換えると、前者二つのうち法家的思想のほうが左伝に強いことは先に「国人」と「民」の単語数の割合で示した通りである。

では呪術的な非合理的思想を、亀井昭陽はどのように読んでいたのか。昭陽は次のように述べている。

> 鬼神・卜筮のこと、左氏、具に録して削らず。実録は世態を表すに在る故なり。人、その実を記すを見て、而して左氏を鬼巫に溺れると謂ふは狂なり。隱十一「邪にして之を詛ふとも、将に何の益かあらん」、哀十八「恵王、志を知れり」。皆、君子の語を挙げる。皆、もって当時、鬼卜の読むを駁正するところなり。左氏の書を為す、孟荀・儒家の倫にあらず。[25]

このうち隱公十一年は、詛いには意味がないとする左伝の記述であり、哀公十八年は、優秀な占い師はその人の志の高さを見てから占いの結果を言うとする記述である。どちらも呪術に対して否定的である。昭陽は、このような呪術否定の記述を取り上げて、左氏の精神性を分析する。左伝には呪術を肯定する記述もあるが、これは当時の人の世界観であって「実録」であると昭陽は解釈する。

『左氏伝』は、ほぼ同時代を描いた『国語』（春秋外伝）に比べると非合理的事象の記述は少ない。大野峻は

『春秋』の直接の伝である『左伝』が一つの歴史観にしたがって、『国語』の迷信的な話を思いきって削除したやり方は、それなりの方法と納得されよう」[26]と述べている。『左氏伝』は、左氏の記述の時点で、ある程度意図的に迷信を否定して書かれていた。昭陽は、初めからある程度迷信を否定しているこの書を、さらに非合理を無視するような読み方で理解するのである。

ii　思想的に拡大

思想的な議論について、昭陽は次のように述べている。

> ああ、一隅を挙げて、人に三隅をもって反せしむるは孔門の規則なり。すなわちこれを煩説し、人の言下に了然せしむるは、これ儒意なり。[27]

このうち「一隅を挙げて、以って三隅にかえる」とは『論語』述而篇の言葉である。[28]昭陽が言うには、「孔門の議論」つまり正しい議論は、余り多くのことを言明しない。言葉を費やして煩雑な説明をすることは「儒意」つまり間違ったやり方である。ある文章から思想的な内容を読み取る場合には、「反す」つまり拡大させて解釈しなければならない。昭陽はさらに「その議論の優游・不迫にして、多少の余地を留めるは、これ孔門の真面目なり」[29]とも言っている。

このような古典の読み方は、ある程度は主観に陥る可能性も有している。どのように拡大して解釈するか、その方法は昭陽において、必ずしも明白ではない。しかしそのような危険をある程度は覚悟しても、思想的に

解釈する重要性を昭陽は認識していた。現代日本の漢文学や清朝考証学は、むしろ思想的な拡大を禁欲しているが、これは昭陽とは好対照である。彼の左伝解釈を国際政治学としてさらに拡大させることは、昭陽自身が否定していなかったのである。

iii　子産・管仲重視

亀井学は、南冥・昭陽ともに古代中国の英雄として、子産と管仲を高く評価している。管仲は斉の国で桓公の宰相を務め、桓公が覇者になることを補佐した。管仲は、法家思想の祖とされ、その思想や活躍は『管子』に詳しい。子産は『論語』などにもわずかに登場するが、『春秋左氏伝』に最も詳しい。[30] 子産は弱小国・鄭国の宰相を務め、巧みな外交戦術と内政の整備で鄭国の独立を全うした政治家であった。子産も管仲と同様に法家に分類される。

子産について南冥は次のように述べる。

> それ夫子、子産を恵主と謂ひ、或ひは之を人の母なりと謂ふ。皆その安民の徳あるを称するなり。然れども、仁を以て之を称するを、我は未だ前聞せざるなり。[31]

孔子が子産を評価していることは『論語』にも見え、南冥はこの事実を重視する。昭陽も必ずしも全てにおいて南冥に賛成しているわけではないが、子産を重視している点においては南冥に一致している。

『左氏伝』には管仲も登場するが、『管子』に比べれば、その記述はずっと少ない。子産を最も詳しく描いて

いる作品が『左氏伝』であることから考えても、亀井流左伝学で最も重要な思想家・政治家は、弱小国の独立を全うした子産である。子産は法家思想によって国際競争下の母国を守った英雄であった。子産の内政手腕や国際感覚に注目して左伝を読むのが、亀井流の理解であると言える。

2　亀井学の思想的特徴

亀井学は『春秋左氏伝』を重視し、特に子産に注目する。この結果、従来の徂徠学にはあまり見られない特徴を有している。仁斎学と徂徠学はある程度の連続性がありつつも、違う学派であると言えるほどの相違性もあった。同様に徂徠学と亀井学も古文辞学としての連続性が認められるが、別な学派と言っても良いほどの相違性が見出せる。ここでは徂徠学との相違については特に述べないが、福沢思想との類似性を指摘するためにいくつか亀井学の特徴を取り上げたい。

i　法家思想への接近

すでに述べたように、亀井学は法家である管仲や子産を重視する。この結果、亀井学は儒学からやや抜け出し、法家思想へと接近していることがしばしば認められる。この傾向は南冥よりも昭陽に、亀井論語学よりも亀井左伝学により一層強い傾向として認められる。昭陽は「儒者は孔門の道を知らざる者かな」[32]と述べ、孟子を含めた以後のほとんどの儒者を否定している。

たとえば、子産は徳治主義に否定的であった。外国の要人を迎える宴の席で鄭国のある政治家が粗相をしたとき、鄭国の別の大夫は徳治主義思想に照らし合わせ、事実上の最高権力者である子産の恥であると進言

した。[33] これに対して子産は「怒りて曰く」、法が正しく施行され、政治家の人選が世論の支持を得ている状態で、その政治家に粗相があるならば、それは最高権力者の恥ではなく、当人の恥である。

この記述について、昭陽はまず「怒りて曰く」という表現が左氏において珍しいことを指摘している。[34] 昭陽はこの部分を「一人の風顛は国体に関せざる」と解釈し、子産による徳治主義の否定としている。さらに、わざと声を荒げて来賓に聞こえるようにした策略ではないかとも推測している。この二つの解釈を相乗すれば、子産は徳治主義を否定し、なおかつそれを外国の来賓にわざと聞こえるように公表したことになる。子産は、徳治主義の否定という点で非儒家的であるばかりでなく、その思想を策略的に公表したならば縦横家的ですらある。

法家思想は『韓非子』がその代表格であるが、韓非子は儒教とは異なり尚古主義を採用しなかった。儒教では古の聖人の治世が理想であり、常にそこへ回帰することが志向される。韓非子は「今、堯・舜・禹・湯・武の道を当今の世に美とする者有らば、必ず新聖に笑はれむ」[35] と述べる。法家では、「聖人」は遠い過去にだけ存在する者ではなく、時代ごとに存在する者である。

この点は昭陽も同様である。昭陽は「孟子の言、必ず堯・舜を称して、儒者これに慣れ、様に依る。葫蘆を描くのみ」[36] と述べる。儒教においては紋切り型と言っても良い堯・舜の単純礼賛を否定するのである。昭陽は清朝の乾隆帝を「聖人」[37] と述べ、古代の政治家のみを聖人とする徂徠の説と異なっている。むしろ管仲や子産のように、方法は何であれ実際に国をうまく治めることが、昭陽にとって重要な条件であった。

また、法家をさらに発展させた縦横家に対しても、亀井学は親和的である。南冥は「戦国弁士の口気、識あり」と述べ、孔子にも「変通」があったことを指摘している。[38] 昭陽も『左傳纘考』で、子産に「権宜の術」が

あったことを指摘している。[39]

戦乱の世を生きた子産たちにとって、「変通」や権謀術数は、国の死活を左右する重大な局面で、なくてはならないものであった。『春秋左氏伝』を読むとそのように解釈できる言動が頻繁に見出される。この『左氏伝』を重視し、思想的には「かえす」読み方をする亀井流では、子産たちの法家的な現実思考が、時には理想主義に流れる儒家よりも重要に見えたようである。

ii　国家独立の重視

子産は、弱小国・鄭国を導いた名宰相であった。鄭国は子産が政治を執る以前には、他の国に無条件降伏したこともあり、既に滅んでいてもおかしくない国であった。この国において事実上の最高権力者になった子産は、晋国や楚国といった軍事大国に対して巧みな外交をおこなった。増税や軍備の充実化などを図って、内政にも力を注いだ。この子産を重視する亀井流は、当然の帰結として「国の独立」を重視する学風となった。

子産は『左氏伝』の中で、「鄭、無腆なりと雖も、そもそも諺に曰く、『蕞爾たるも国なり』[40]」と言っている。南冥は『春秋左伝考義』でこの部分に注釈をつけ、「蕞爾、小と雖も、また是、一国を言ふ[41]」と述べている。昭陽は『左傳纘考』で「国の小無きと一意なり[42]」と言っている。南冥・昭陽ともに、子産の言葉を「どんなに小国であっても、一国は一国である」という意味に解釈している。南冥は『考義』の別のところでも「国に大小なし[43]」と言い、その国に「礼」があるか否かを重視している。『論語語由』でも「蕞爾羸国[44]」を導いた宰相として子産を賞賛している。

また、子産は「国競はずして亦凌がる。何ぞ国を之れ為さん[45]」と左伝で述べている。現代の漢文学者である

鎌田正は、これを「国勢が振るわずして他国に侵されている」[46]と解釈しているが、昭陽は『纘考』において「国、すでに競わずして、また人をおさめ凌ぐところなり」[47]と解釈する。国家が他の国と競争しないで凌いでいたとしても、それは本当の意味で「国の独立」にはならない。他の国と競って独立してこそ、真の独立であるという意味に解している。この解釈は、明治において対中国・朝鮮外交で活躍した竹添進一郎も『左氏会箋』で相続している。明治の竹添までは、亀井学の国際政治思想が相続されていたことの一例である。現代の左伝解釈では忘れられているが、国家の独立は、他国と断交して保つべきではなく、他国と競争しつつ主権を守ってこそ本当の独立であると亀井学は考えるのである。

iii　国人による国家統治

すでに述べたように、『春秋左氏伝』には、多くの「国人」が登場する。『春秋経』も含めれば千回以上「国人」について言及され、「君・臣・民」といった図式は比較的弱い。左伝ではこの「国人」が政府を立てたり、国家を統治したりする逸話について多く言及している。

南冥は『論語語由』で「国人」が王を立てたり[48]、「国人」が権力者と統治契約の「盟」を結んだりすること[49]について述べている。亀井学では国家に所属する「国人」が先天的に存在し、この「国人」によって国家を統治する政府が形成されることがある。南冥はいたずらに君臣関係を破壊しようと考えるわけではないが、君臣関係を絶対的なものであるとも考えていない。春秋戦乱の時代には、君臣関係が実際に破壊されることがしばしばあった。この時代に多くの思い入れを持つ南冥は、良し悪しは別として、君臣関係を絶対的に堅固なものとは思わなかった。

昭陽も、この思想を共有している。昭陽は、「君臣、上下、貴賤、尊卑の別、外飾にあり。而して天地の素にあらざるなり」[50]と述べる。『春秋左氏伝』が描く戦乱の時代では、君臣の形式は「外飾」にも似た儚いものである。このように君臣関係を相対的に見る傾向は、徂徠学には余り見られない亀井学独特の傾向であろう。

これは昭陽が生きていた江戸時代の常識とは異なるものである。このような思想を昭陽が持ちえたのは、やはり彼が古文辞学の読解法によって不朽の古典に習熟していたことによる。古典がもつ訓育の力は、思想家が現に生きる時代の政治的・経済的状況を超越させ、より普遍的な価値観へといざなう。徂徠学以降、古文辞学による客観的な読解法が、それを可能にしていた。当時世界で一番詳しく『春秋左氏伝』を読んでいた亀井流には、このように時代を超越することが可能であった。後に欧米列強が迫り、日本の独立が危ぶまれるようになった時、「国の独立」を重視する国際政治学、亀井流左伝学は、遺憾なくその力を発揮する。その一つが、対朝鮮・中国外交で活躍した竹添進一郎による『左氏会箋』の執筆である。[51]そしてもう一つが、稀代の洋学家・福沢諭吉による言論・教育活動ではなかったか。

三　福沢諭吉と亀井学の類似点

1　国家の対等性と独立

亀井学は、弱小国である鄭を導いた名宰相・子産を重視する。そのため、どんなに小国であっても一国は一国であるという思想を持つ。子産は国家の独立を守るため、富国強兵に尽力した思想家であった。

『論語』衛霊公篇に「有教無類」という言葉がある。南冥はこれを「政教の民を化する、種類ある無きなり」[52]とする。どんなに野蛮な民族であっても「教え」を広めることで、その国は強大化し、文明国になることができる。ここでも南冥は『春秋左氏伝』を引き、南蛮であった呉国が中国文明を導入して強大化した事実を例とする。また管仲が「富国強兵」を行った史実を賞賛し[53]、商業と軍事によって国家を隆盛にすることに多大な関心を持っていた。

福沢諭吉も「蕞爾たるも国なり」と同様の思想を有している。福沢本人がどれだけ明白に意識していたかはわからないが、事実上亀井学のこの思想を福沢は相続している。福沢は当時の日本について「今日の有様にては西洋諸国の富強に及ばざるところあれども、一国の権義においては厘毛の軽重あることなし」[54]と述べる。亀井学は「国に大小なし」という思想を持っていたが、福沢はこれを当時の日本に当てはめて考えている。

また、福沢は『民間経済録二編』で次のように言っている。

> 方今我国の人民、勉強は即ち勉強なれども、又一方には只管西洋諸国の事物を信じ、之を信ずるの余り所謂心酔なるものに陥り、一切万事西洋には及ばざること、恰も自から画して、財政の事に於ても、彼は富国なり我は貧国なり、貧富到底敵す可らずとて最初より落胆する者なきに非ず。前途の望に絶念する者と云ふ可し。用心覚悟は人生に大切なることなれども、其極度に至て却て自暴自棄の境界に沈むも亦甚だ歎かはしきことなり。本文の論旨は唯この自棄の念を去て前途満腹の望を抱き、日本の国必しも貧ならず、日本の人必ずしも愚ならざるを信じて、以て大に勉強する所あらしめんとするの微意のみ。[55]

欧米に日本は到底かなわないとする当時の悲観論に対し、福沢は否定的であった。どんな弱小国であっても、文明を取り入れることでその国は強大化できる。この思想は、亀井学が『春秋左氏伝』から歴史的事実として読み取り、強調した思想であった。

福沢が「国の独立」に生涯こだわった事実は、当然のことながら、幕末・明治の国際状況の反映でもある。福沢が「国」について考えるとき、藩よりも日本全体をより重視していたことは、国の開鎖論が流行した当時の時代精神の影響であろう。彼個人の蘭学者としての勉学や洋行の経験も、「国」を日本として意識させることに影響したはずである。

しかしなぜ福沢は当時の状況において、いち早く国の独立と文明発達論を連関づけて論じられたのか。当時の社会状況だけが決定的な要因であれば、当時の人は皆同じことを考えたはずである。福沢が当時に於て傑出した思想家であり得たのは、いち早く英学に励んだことと、当時としては洋行を豊富に経験したことも挙げられよう。が、今一つ重要な点は、国際政治学である亀井流左伝学を学び、その上で洋学も学んだ福沢の学問遍歴ではないか。この国際政治学原論を洋学の知識によって応用することが福沢政治学の基本姿勢であるとすれば、欧米列強が迫る当時の情勢に於て独自の国際政治論を展開することは、当時の多くの人ができることではない。この二つを学んだ人は、他にほとんど例がないのではないか。福沢の政治思想において亀井流左伝学の影響を考える重要性はここにある。

2　言論の自由

亀井学は子産の政策を重視したが、子産は言論の自由を国策として積極的に認める政策をとった。通俗的に

は言論の自由は近代国家にしか存在しないとされているが、これは欧米中心史観に流れた間違いであろう。漢字文化圏においては、この思想は歴史上現れては消え、消えては現れるようなことを繰り返している。

『春秋左氏伝』によると、鄭国の国人が郷校で自由に政治・学問の議論をしていることに、鄭の大夫である然明は憂えた。[56] 然明は、子産に郷校を壊したらどうかと進言した。子産はこれに反対する。国民がどう思っているか、郷校における議論で参考にすることができる。世論は「吾が師」である。また、国民の怨みを力ずくで制圧することはできない。国民の不満は少しずつ解消させてやるべきである。言論を弾圧し、ある日突然国民の怒りが爆発するようなことになれば、その方が国家の損失である。

亀井学はこの政策を非常に重視する。南冥は「その国人をして克・伐・怨・欲を行はざらしめたる者は、春秋の間、孰か子産の如きか」[57]と賞賛する。言論の自由を積極的に認めたことで、子産は勝気、自慢、恨み、欲張りといった当時の人々の欲望が増大することを防いだ。昭陽もこの政策を高く評価し「言路を開くは建国の基なり。聖人の政、万世の刑なり。その時において宜しきことを挙げて之を行う、之を善政と謂ふ」[58]と述べる。

福沢の『学問のすゝめ』十三編「怨望の人間に害あるを論ず」は、ほぼこの議論と同じである。南冥は国民に「怨」を蓄積させなかった子産の政策を評価したが、福沢も「怨望」を蓄積させないために言論の自由を認めるべきであると考えた。昭陽は「言路を開くは建国の基なり」と言ったが、福沢は「人の言路は開かざるべからず、人の業作は妨ぐべからず」[59]と言っている。『文明論之概略』でも「政府もし世間の実情を知らんと欲せば、出版を自由にして智者の議論を聞くに若かず」[60]と主張している。

福沢は演説の重要性を説き、「学問の道において談話演説の大切なるは既に明白」[61]であるとする。これも直

接は欧米における見聞で触発されたものであろうが、やはり言論・学問の自由の延長上に発想されたものではなかったか。また、福沢は『学問之独立』で民間の私塾が自由に学問をする大切さを説いている。これらの主張は、かような亀井学の議論による影響も加わっていたものと思われる。

3　権謀術数の肯定

亀井学は法家である管仲や子産を高く評価した。その結果、「変通」や「権宜」を肯定的に評価し、縦横家にも接近した。福沢の師匠であり亀井学を奉じた白石照山は、未完に終わったものの、その生涯の一大事業として『戦国策』の注釈を計画していたと伝えられる。『戦国策』は言うまでもなく、「権謀術数」を唱えた縦横家の活躍を描いた書である。

福沢も『文明論之概略』で、管仲や縦横家が「時勢に順うの巧なる」[62]ことについて直接言及している。しかしより重要なことは、頻繁に指摘される福沢の基本的な性質についてである。丸山眞男は、次のように言っている。

> 福沢は自己の「役割」ということについてまれに見る醒めた認識を持っていた。彼の言動や選択は、自分が何を欲するかよりも、まず、時々の状況において事柄のどの側面を強調するかがヨリ必要であるかという冷徹な考慮によって決定されることが多かった。[63]

この指摘は丸山に限らない。大嶋仁は福沢のことを「トリックスター」であるとさえ言っている。[64] 状況におい

て様々に言い方を変え、変幻自在に態度を変える福沢の特徴は広く指摘されている。ところが、福沢の直接の師匠が文字通りの「権謀術数」の研究家であったことは、余り知られていない。白石の権謀術数研究は、白石において突然始まったことではなく、そもそも亀井学がこのような非儒家的な思想に多大な関心を持っていたのである。

亀井昭陽と福沢諭吉がともによく使う言葉として、「時勢」の語を挙げることができる。両者とも、政治家など活動者が「時勢」を読み、正しく判断して事に当たることを重視していた。福沢は『文明論之概略』第七章の冒頭で「事物の得失便不便を論ずるには、時代と場所とを考へざる可らず」と言っている。彼はいかなる状況でも同じ態度を一徹するのではなく、状況対応に巧みであることを重んじた。その結果、両者ともこの語を頻用することになったのではないか。

4　儒家への攻撃

亀井昭陽は「君臣」の義を相対化し、孟子以降の儒者の議論を否定する。『左傳纘考』では「儒者は孔門の道を知らざる者かな」と嘆いている。亀井学は、徂徠学の流れを汲んでいるが、孔子以外の儒家に対しては批判的である。

福沢諭吉の儒家批判は広く知られている。洋学者の存在意義を認めさせるため、儒学を含めた漢学への攻撃を頻繁に行った。この議論は、一見すると亀井学との距離を感じさせる。

しかし丸山眞男も指摘するとおり、後期の福沢における儒教批判は、あくまで腐敗した儒教へと限定される傾向にあった[65]。息子の福沢三八の証言によれば、諭吉は孔子を聖人として認め、個人的には漢文漢詩を非常に

好んだ。[66] 多くの議論の中で、次の『福翁百話』三十四「半信半疑は不可なり」における主張は亀井に近い。

酒に水を和したるものは尚ほ飲む可し、魚油は即ち不可なり。儒教本来の主義如何は姑く擱き、其数千年間に腐敗したるものを採て今の文明学理に附会せんとするは、酒中に魚油を和するに等し。我輩の取らざる所なり。[67]

福沢はここで「漢学は学問として視る可らず」と言い、儒学を含めた漢学を厳しく批判する。ところがこの議論自体が「儒教本来の主義如何は姑く擱」く上でなされていた議論であった。儒教本来の議論とは言うまでもなく孔子の思想であり、これは否定していない。福沢が主に攻撃しているのは、その後の「腐敗した」儒家たちである。

先に述べたように昭陽は「君臣」の義は「外飾」であって先天的ではないと言っていた。福沢も「元と君臣は人の生れて後に出来たるものなれば、これを人の性といふ可からず」[68]と主張している。福沢の儒教批判は、尊皇攘夷運動によって命の危険にさらされたことなど、福沢個人の実感が混入しているのでその学問的真意が判定しにくい。しかし亀井学が、法家的傾向を持ち、「儒家」「儒意」「儒理」「儒者」と明言してこれらを攻撃したことを考えれば、さほど福沢との距離は遠くない。福沢は『福翁百余話』十七「物理学」で、福沢の言う「洋学」と『韓非子』の思想的内容が近いことも示唆している。[69] 韓非子など法家は尚古主義を採用せず、この点においても福沢の歴史観と親和的である。法家は徳治主義を否定して法治主義を主張するが、この点でも亀井左伝学と福沢は共通している。

四　まとめ

亀井学は、当時世界で最も詳しく『春秋左氏伝』を読んでいた学派であった。弱小国である鄭国を導いた宰相・子産を重視する亀井左伝学は、国の独立を重視する学問であった。また子産が法家であることから、亀井左伝学も法家的特徴に満ちていた。亀井左伝学は言論の自由を国策として重視したり、君臣の義を相対化する思想も持っていた。これは、『春秋左氏伝』という不磨の古典が持つ普遍性を、亀井左伝学が相続していた証であった。

福沢は生涯にわたって「国の独立」を主張し続けた思想家であった。この思想には、福沢が蘭学以前に学んだ亀井左伝学という「縦の資力」が生かされていた。国際政治学的関心や権謀術数の肯定など、亀井左伝学と福沢の思想は多くの類似性が確認できる。福沢は明治時代について、江戸時代からの飛躍を強調する面もあったが、逆に連続性を主張することもあった。彼自身の思想は、亀井左伝学からの連続性を確認できる。

最後に今後の課題について、言及したい。本稿は、紙幅の都合もあり、亀井流左伝学の学問的特徴を明らかにし、それと福沢の基本思想が類似していることを指摘したに留まった。今後は、福沢における洋学の影響も考慮しつつ、彼の時々の主張において、亀井学がどのように活かされているか、より詳細に明示してゆきたい。また『左傳纘考』や白石照山についても従来の研究はほとんどないので、これらも課題としたい。

注

(1) 慶應義塾編纂『福澤諭吉全集』(岩波書店、一九五八～六四年)、五巻、一一六頁。以下、福沢の書について、岩波文庫に所収の作品はその頁数を、それ以外は全集の頁数を記した。

(2) 管見の限り、福沢における和漢書の影響について述べた作品は、古田島洋介「福沢諭吉の文章と漢文訓読」(福沢諭吉協会『福澤諭吉年鑑』24、一九九七年)、小久保明浩「中津における福沢諭吉の修学とその世界」(同9、一九八二年)、今永清二『福沢諭吉の思想形成』(勁草書房、一九七九年)などがある。

(3) 福沢諭吉『福翁自伝』(岩波文庫、一九七八年)、一五～六頁。福沢は「十五巻」と言っているので、諸事情からしてこれは秦鼎の『春秋左氏伝校本』ではないかと思われる。

(4) 慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』(岩波書店、二〇〇一～三年)第一巻、一一四頁。

(5) 神山四郎は『福澤諭吉の歴史観―「文明論之概略」刊行百年記念―』(福澤記念選書一五、一九七五年)二三頁で次のように論じている。「『文明論之概略』というこの本の最大の論点はどこにあるのかと申しますと、…最後の巻で国の独立を論じているところにあるのだと思います。これはバックルにもギゾーにもないもので、先生が独自の発想で書かれたものでございます」。小泉信三も福沢における国家独立論が、西洋思想の影響ではないことを指摘している。『小泉信三全集』、(文藝春秋、一九六八年)、第二十一巻三六六～七頁。

(6) 『福翁自伝』岩波文庫、二〇七頁。

(7) 従来亀井南冥に関する研究は非常に少ない。本稿が参考にした研究書、啓蒙書は、高野江基太郎『儒俠亀井南冥』(共文社、一九一三年)、荒木見悟『亀井南冥・亀井昭陽』(明徳出版、一九八八年)、辻本雅史『近世教育思想史の研究』(思文閣、一九九〇年)などである。このうち研究書と言いうるものは辻本だけであるが、この書は南冥晩年の発狂を徂徠学に附会したり、南冥失脚と寛政異学の禁を強引に結びつけるなど、難点が多い。異学の禁と南冥失脚が無関係であることは、八木清治「亀井南冥廃黜事件考」(『武蔵大学人文学会雑誌』第二九巻第一・二号、武蔵大学人文学会、一九九七年)も指摘している。

(8) 昭陽については南冥よりさらに研究が少ない。管見の限り、南冥の家風の相続という形以外で昭陽を独立に扱った研究書は、存在しないと思われる。

(9) 荒木『亀井南冥・亀井昭陽』一七八～八〇頁に南冥・昭陽の著作目録と刊行・未刊行の別が明記してある。この目録に漏れたもので、筆者が現物を確認できた書に亀井昭陽『史記抜粋』（慶應義塾三田図書館・旧館所蔵の写本）がある。

(10) 『左傳纘考』「附録」原文三七丁。『左傳纘考』は、葦書房の全集に所収のものが読みにくいので、大正六年の復刻版を利用した。原文の丁数は必ずしも通し番号になっていないが、巻数と丁数で分別がつくのでそちらの数字をあげることにした。

(11) 同書、「附録」三八丁。

(12) 弘化三年、廓然堂藏版、書末の「左伝雕題略抜」による。

(13) 『左氏会箋』（冨山房、一九〇三年）上巻、「自序」三頁。『左氏会箋』は引用した文献を必ずしも明記していないだけでなく、『左傳纘考』を引きながら「箋曰く」としている箇所が無数にある。竹添が昭陽の研究に負っている点は、非常に多い。

(14) 亀井南冥・昭陽全集刊行会編『亀井南冥・昭陽全集』（葦書房、一九七九年）第六巻、四七一頁。同じく『家学小言』第二十七章では『孔子家語』を重視する。昭陽は『家語考』という書を記したらしいが、現在伝わっていない。荒木前掲書九二頁。

(15) 亀井学は後述するように、子産や管仲など実際に国をうまく治めた政治家も評価する。この基準に照らすと孔子を評価したことは矛盾である。これは今後の考察を要する問題である。

(16) 白石に関しては、赤松文二郎編纂『照山白石先生遺稿』（照山白石先生遺稿編纂会発行、一九三〇年）が最も重要な書である。しかし校正があまく、誤字脱字や返り点の間違いの多いことが惜しまれる。

(17) 『福翁自伝』岩波文庫、五〇頁。

(18) 『照山白石先生遺稿』上巻、六〇頁。

(19) 『福翁自伝』岩波文庫、一六頁。

(20) 『照山白石先生遺稿』「追悼会報告」三三頁

(21) 『左傳纘考』「附録」三二丁。昭陽は、宋代の孫復を紹介し「申・韓の学を以て春秋を説くは、この人より始まる」としている。

(22) 吉田賢抗、新釈漢文大系一『論語』（明治書院、一九六〇年）、三一八頁。

(23) 小倉芳彦「解説」(『春秋左氏伝』岩波文庫、一九八九年)、下巻五一一頁。
(24) 津田左右吉『左伝の思想史的研究』(東洋文庫、一九三五年)、六四四頁
(25) 『左傳纘考』「附録」七一～三丁。
(26) 大野峻「国語改題」(新釈漢文大系六六『国語(上)』明治書院、一九七八年)、二九頁。
(27) 『左傳纘考』「附録」三二丁。
(28) 昭陽はこの時「『論語』曰く」と言わずに、この言葉を唐突に使っている。亀井学の文章が難解であることを示す典型的な例である。しかし筆者は『論語』等のデジタル・テキストをコンピュータ検索することにより、経験の不足をそれなりに補えたと考えている。
(29) 『左傳纘考』「附録」六七丁。
(30) 子産と『左伝』の関係については、山岡利一『中国古代思想研究序説　子産の生涯と思想』(前田書店出版部、一九七八年)が有意義である。
(31) 『亀井南冥・昭陽全集』一巻、一四一頁。
(32) 『左傳纘考』一七巻、八六四丁。
(33) 新釈漢文大系三〇～三三『春秋左氏伝』(明治書院、一九七一～八一年)、一四三八～九頁。
(34) 『左傳纘考』一二三巻、一三二八丁。
(35) 新釈漢文大系一一～一二『韓非子』(明治書院、一九六〇～四年)、八二七頁。
(36) 『左傳纘考』一七巻、八八五丁。
(37) 同書、「附録」三四丁。
(38) 『亀井南冥・昭陽全集』一巻、一八九～九〇頁。「変通」は、同書、同巻、一七三頁。
(39) 『左傳纘考』二一巻、一一九三丁。
(40) 『春秋左氏伝』明治書院版、一三二四頁。
(41) 『亀井南冥・昭陽全集』一巻、三一三頁。
(42) 『左傳纘考』二一巻、一一九五丁。
(43) 『亀井南冥・昭陽全集』一巻、二六三頁
(44) 同書、同巻、一一七頁。

(45)『春秋左氏伝』明治書院版、一四一五頁。
(46)同書、一四一六頁。
(47)『左傳纘考』二三巻、一三〇一丁。
(48)『亀井南冥・昭陽全集』一巻、七七頁。ただしこれは『左伝』ではなく『史記』列伝の逸話の紹介である。
(49)同書、同巻、一七三頁。
(50)同書、六巻、四九八頁。
(51)竹添進一郎については『桟雲峡雨日記』について近年研究が進められている。町田三郎『明治の漢学者たち』(研文出版、一九九八年)、財木美樹「竹添井井『桟雲峡雨日記』訳注一～五」(『東洋古典学研究』東洋古典学研究会第三～七集、一九九七～九年)など。
(52)「有教無類」は葦書房版の『亀井南冥・昭陽全集』には記載漏れである。筆者はこの箇所を慶應義塾斯道文庫所蔵の『論語語由』などで確認した。
(53)『亀井南冥・昭陽全集』一巻、一四七頁。
(54)福沢諭吉『学問のすゝめ』(岩波文庫、一九七八年、改版)、二八頁。
(55)『福澤諭吉全集』四巻、三八四頁。
(56)『春秋左氏伝』明治書院版、一一八四～五頁。
(57)『亀井南冥・昭陽全集』一巻、一四一頁。
(58)同書、六巻、四九〇頁。
(59)『学問のすゝめ』岩波文庫、一二〇頁。
(60)『文明論之概略』岩波文庫、一一二頁。
(61)『学問のすゝめ』岩波文庫、一〇七頁。
(62)『文明論之概略』岩波文庫、九〇頁。
(63)現代日本文学全集五一『福沢諭吉　内村鑑三　岡倉天心集』(筑摩書房、一九五八年)、四一二頁、丸山による「解説」より。
(64)大嶋仁『福沢諭吉のすゝめ』(新潮社、一九九八年)、第二章。
(65)丸山眞男『福沢諭吉の哲学』(岩波文庫、二〇〇一年)、二七頁。

(66)『父諭吉を語る』(福沢先生研究会、一九五八年)、五頁、一一頁。
(67)『福澤諭吉全集』六巻、二六二頁。
(68)『文明論之概略』岩波文庫、六四頁。
(69)『福澤諭吉全集』六巻、四二六頁。

(さかもと　しんいち　PHP総合研究所研究員)